

しゅんおうしゅう

#31 春鶯集

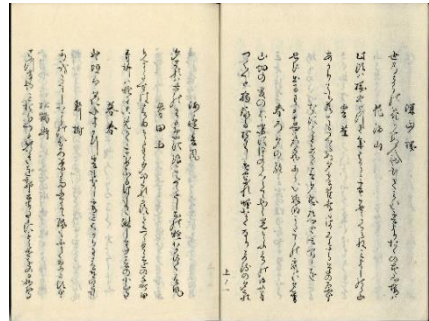
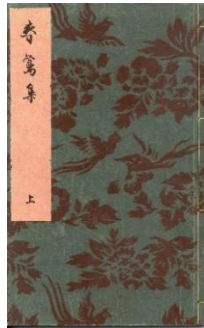
作者：大久保忠真（おおくぼ・ただかね 1781-1837）

刊行：天保13年（1842）


 解題

■ 内容

『春鶯集』は江戸時代の小田原藩主、大久保忠真の没後七年忌の追善として作られた歌集である。編者は北村季文であり、



[K92.7/2]

序文を書いている（再昌院法印季文とある）。

『神奈川県郷土資料集成 第8輯 和歌編』によれば、忠真は和歌を加茂季鷹に師事したという。本文を見ると構成は編年順となっており、文化7年（1810）から始まっている。この年は忠真28才、大坂城代に就任した頃であるので、この年の前後から歌を詠み始めたと思われる。『大久保侯と二宮翁』に「経営の材に兼ねるに花鳥風月の情あり」とあるように、和歌は武士でありながら典雅な作風であるといえよう。上・中・下の3巻からなり、上巻には文化7年（1810）から文政元年（1818）までの462首、中巻には文政6年（1823）から天保2年（1831）までの332首、下巻には天保3年（1832）から天保7年（1836）までの350首、合計1144首が収録されている。

■ 作者

作者大久保忠真（幼名秀次郎、新十郎）は江戸後期の小田原藩主。天明元年（1781）、芝（江戸）の藩邸に生まれた。

第3章 文芸

寛政8年(1796)16歳の年に父大久保忠顕が隠居したことにより、小田原の領主となる。小田原大久保氏の第11代にあたる。大坂城代、京都所司代を経て文政元年(1818)老中、天保5年(1834)老中首座となる。川路聖謨、間宮林蔵等を見出し、一方で二宮尊徳を抜擢登用し、藩政改革に努め、また藩校集成館を設立するなど斬新な手法で藩政に尽力した。松平定信に傾倒し、詩や和歌、書画に親しみ、公淑、楽園、華獄と号した。『春鶯集』3巻の他に随筆『春の閑話』『躍魚堂随筆』の著作がある。

天保8年(1837)3月、病気のため江戸藩邸にて死去。

本文を読む

<翻刻>

「春鶯集」(『神奈川県郷土資料集成 第8輯 和歌編』神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編 神奈川県図書館協会 1975) [K08/1/8] [K2/93]
[C3.3/村/8]

参考文献

『大久保侯と二宮翁』作者・発行不詳 1905 [K157.7/5]
『大久保神社記』瀬戸秀兄著 大久保神社 1935 [K17.7/1b]
『神奈川県史 別編1 人物』神奈川県県民部県史編集室編 神奈川県 1983
[K21/16-4/1]
『小田原市史通史編 近世』小田原市編集・発行 1999 [K1.7/21/2-2]
馬場弘臣「大久保忠真」(『江戸時代神奈川の100人』神奈川近世史研究会編 有隣堂 2007 [K28/362])